5　おばこ石伝説

昔、上田沢に源七という大百姓が住んでいた。源七にはおばこという美しい娘がおり、思いを寄せる若者が多くいた。

ある日、上野（こうずけ）の国から一人の浪人が村にやって来た。名を上野聞太と改め、里からちょっと離れた豆栗沢の台地を開墾して暮らしていた。聞太には息子が一人あり、名を弥兵衛といった。弥兵衛は武士の血を引くだけに、立派な凛々（りり）しい若者に成長し、おばこと恋仲になった。

やがて、父の聞太が病死し、弥兵衛はおばこと結婚の約束を交わした。弥兵衛は、おばこの気持ちを確かめようと、ある日「五月の節句の餅つきに、お前の家の臼を借りたい。背負って来てくれ」と頼んだ。おばこは好きな弥兵衛の頼みに、喜んで重い臼を背負い弥兵衛の家に向かった。ようやくの思いで峠に辿り着き、一休みしようとした途端、臼は荷縄から外れ谷底に落ちていってしまった。あまりのことに、おばこは悲しみ、そのまま石になってしまった。

一方、弥兵衛はおばこがいつまで待ってもこないので、心配になり峠まで行ってみた。そこで弥兵衛が見たのは、石になったおばこの姿だった。弥兵衛は、いまさらのように自分の浅はかさを後悔し、おばこの後を追ったという。

今でも打野には、この田畑の跡が残っている。「おばこ石」、「おばこ沢」、「臼沢」などの地名が、この悲しい恋の物語を伝えている。